

種文学賞 令和五年第二回目 作品集 上巻

令和五年第一回目の種文学賞は、

・小学三～四年生の部「お気に入りの場所」

・小学五年生以上の部「あなたは戸堂布根田根市民」

というお題で作品をつくり、最終的に全十四名による力作がそろいました。

この上巻では、小学三～四年生の部の全作品と、小学五年生以上の部の作品のうち小学五年～六年生までの作品を発表します。

目次

〈小学三年生の部〉		
(作者)		
きつたちうくお	……	三ページ
Z	……	四ページ
たつくん	……	五ページ
もみじ	……	六ページ
だいこん	……	六ページ
璃久	……	七ページ
〈小学五年生以上の部〉※小五、小六の一部のみ		
いちご	……	九ページ
イピロー	……	十一ページ
オセロ	……	十四ページ

## ◆ 小学三〜四年生の部 ◆

この部では、自分のお気に入りの場所を紹介するという内容で文章を書いてもらいました。単に「気に入っている場所はどこか」を書くだけで終えてしまうのではなく、その場所や、そこでの過ごし方について具体的に語ることをがんばってもらいました。

みなさんの苦心の成果を、どうぞごらんください。

\*\*\*\*\*

### リビング

きつたちうくお(小三)

ぼくにはお気に入りの所が二つあります。一つ目はぼくの家の一かいのリビングです。そこで何をするかと言うとゲームをしたりごはんを食べたり勉強したりします。このリビングのいいところはテレビが大きいしおりがみとか勉強づくえがあることです。

二つ目はぼくの家の二かいのリビングです。そこで何をするかと

言うとならぶ工をしたたりテレビを見たりマンガをよんだりします。このリビングのいいところはテレビが大きかったり自分のへやに近かったりパパのへやがちかかったりすることです。一かいのテレビより二かいのテレビの方が四倍大きいです。二かいのリビングでヨギボーにねころがりながらマンガをよんでいたらきもちいい気分になります。ママに「じゅくいくよ」と言われても行きたくなくなりま

す。  
一かいのリビングでは勉強している時、勉強はたいへんだなと思っています。ゲームをし始めたならその気もちがきえます。そのときは天ごくだーという気もちになります。

この二つのリビングはぼくにとっては、百点満点です。みなさんはどんな家に住んでいますか。

\*\*\*

## 自分が好きな場所

### Z(小三)

ぼくは芦屋浜公園あしやはまこうえんが好きです。芦屋市の南の方の海に近い公園です。好きな所は虫が他の公園よりもとても少ないことや、とても広いことや、遊具ゆうぐがけっこう多いことや、草原の場所があり雨がふった後でもかわきやすいため、すぐに遊べることや、自しぜんがたくさんあることです。広いのでたくさん遊べるし、ピクニックもできます。

ぼくの家の近くの公園には、虫がたくさんいます。とくに多いのはカです。虫よけをしていても2、3か所さされてしまいます。芦屋浜公園の場合、虫よけをしていなくてもほとんどカにさされません。夏

にびつたりの場所だと思います。

芦屋浜公園の広さはぼくの小学校のグラウンド4つくらいです。とても広いのでぼくも大人がいないとまよってしまうほどです。

遊具は8つくらいあります。その中で一番好きな遊具は「タイヤブランコ」です。ふつうのブランコだと前後にしか動きませんがタイヤブランコの場合、前後左右に動きます。クルクルと回るので、ふつうのブランコよりも楽しめます。

この公園にある草原の場所は、土よりすべりにくいので、運動する場所にはオススメです。他にもかげがあるので夏場に休けいするのにもオススメです。

芦屋浜公園には自ぜんがたくさんあります。道には落ち葉がおち、木もたくさんあるので自ぜん好きな人にはオススメです。

ぼくは芦屋浜公園を野球やきゅうの練習場れんしゅうじょうのように使っています。4才

から6才くらいまでは、遊ぶ場所として利用していました。今では野球の練習場として利用しています。これからも芦屋浜公園で野球の練習をしていきたいです。芦屋浜公園、よろしくおねがいます。

\*\*\*\*\*

## ぼくの部屋

たつくん(小三)

ぼくのお気に入りの場所は、家の一かいにある自分の部屋です。

なぜそこがすきなのかというと、なぜか木のいいかおりがするからです。そのいいにおいにつられて、ねてしまっぐらいです。

この部屋には、ぼくの文ぼうぐや、服や、テレビや、ベッドやラジコンやゲームソフトやささまな物があります。ベッドがあつてそこで

毎日ねたりおきたりしています。勉強もこの部屋にあるつくえでやっています。

ですが、ごはんを食べる時や、家ぞくとお話しをする時は、リビングにいます。自分の部屋とリビングをくらべて、部屋は少し小さいですが、リビングは広くて、部屋よりいっぱい物があつてあります。それは、お母さんの物も、お父さんの物もあつて、もちろんぼくの物もあります。リビングは、いろいろな物があつてあるので、いろいろな物はかたづけたり、すてたりしています。ですが物はほとんどふえていきま

す。  
けれど部屋は、かたづいてるので、すっきりいいじょうたいです。そのきれいなじょうたいにするには、すこくいいばいかたづけました。

この部屋の中にいるときは、気持ちよくて、しあわせです。これか

らも部屋にいる時は、気持ちよいじょうたいにしていきたいです。

会人になってけっこうしてここをはなれてもわすれたくありません。

\*\*\*

### ぼくのすきなリビング

もみじ(小三)

ぼくのお気に入りの場所はぼくの家のリビングです。リビングは広く、ソファ、テレビ、たんす、本だながおいにあります。リビングでは、おちつけるし、安心もできます。リビングでは、本を読んだり、ふくをたんすからだして着たり、家族でソファにすわってテレビを見たりします。リビングは、他のへやよりも物がすくなくいけれど、ゆったりするスペースもあります。学校から家に帰ってきた時に、すずしい風も入ってくるし、お母さんが作ってくれるばんごはんのにおいもするのでおちつけるのです。リビングは、ぼくには大切な場所なので社

\*\*\*

川

だいこん(小四)

みなさんはいい感じがありますか。ぼくには、あると思います。今からこわい話をします。ある中学2年生の男子2人と女子3人がある川で遊んでいました。水深4〜5メートルあって1人がダイビングしていました。しばらくして雨がすくくふってそのダイビングした人以外の人は雨がふったので帰ったけれど、ダイビングした人だけはこのこっていました。その後もう一回とびこんだら川に流されて、たきから落ちて死んでしまったのです。ぼくはこのじこを知らずに、そ

のじこがあった場所でよく遊んでいました。そこで遊んでいると、前からずつといやな予感がしていたので、このじこがあったときいて自分になれる感があるとぼくは思いました。

この川はとてもこわい場所だと思っうでしようがそこまでこわくありません。

ぼくは、魚を取りに友達や家族とよくここにきます。魚はいっぱいいるわけではありません。けれど大きいのがいたりして数少ないです。しかし、取れたときはうれいいです。

川には、いっぱい人がいて、川の上でジョギングしたり、犬の散歩をしたりする人もいます。川の上を阪急電車の線路や道路がわたっているところもあります。夏休みは8回ぐらいいきました。水でつぼうで遊んだり魚を取ったりしました。

すこくぼくの家から近いのでよく通ります。

この川にはたきが多いので友達とどっちが長くたえられるかをきそいあいます。また、川原でひなたぼっこをします。そうするといいい気分になれます。

この川で事があったけれど、ここまで話して来たことで、ぼくはこの川がお気に入りです。

\*\*\*\*

### さらいけ公園

璃久(小四)

ぼくは野球が好きです。マウンドに立ってピッチャーをするよりも、バッターボックスに立ってバッターをする方が好きです。ボールを打たしゅん間がとても気持ちが良いからです。だから、ぼくは友達と野

球ができるさらいけ公園が好きです。

その場所は、西宮市の大谷町にあります。その公園には、遊具は一つもありません。だから、大きな広場になっているので、野球ができます。公園の広場は、二段に分かれていて、下の段の方が上の段より

一・五倍くらい大きいです。段の上と下の間には小さな草むらがあり、ぼくはよくそこでボールをなくします。地面はしばぶてはなく、砂でできています。それで、公園の周りは生けがきが出ていて、またその周りは住宅地です。

ぼくたちがどのように野球をやっているかは、まずぼくたちは下の段で上の段に向かって打つようにしています。なぜなら、上の段に向かって打つようにしなかったら、住宅地に打ってしまうか、草むらにボールが入って見つからなくなってしまうからです。下の段が空いていないときには、上の段でしています。ぼくたちが上の段でどのように

やきゆうをしているかは、かどから、かどまで打つようにしています。なぜなら、ぼくたちが野球をやっている時にはあまり大きなヒットは出ないと大きなヒットでも、生がきにあたってはねかえってくるからです。

ぼくは、友達と野球ができるさらいけ公園が好きです。これからもさらいけ公園で友達と野球をしたいです。



## ◆ ◆ 小学五年生以上の部 ◆ ◆

この部では、ある架空の町「戸堂布根田根市」の地図を見て、その町の住人になりきって文章を書くというお題でした。町を舞台にした架空の物語や、日記、エッセイなど、個性あふれる作品がそろいました。

左のQRコードを読み取ると、「戸堂布根田根市」の地図をご覧ください。ただけますので、まずはそちらをご覧ください。それぞれの力作をお読みください。



\*\*\*\*\*

### カツパとの出来事

いちご(小五)

私は、市立巢見矢中学校に通っている。塾は、進学教室エリート墨屋校に行っている。その塾をエリートと私はよんでいる。エリートすみやの宿題で町の有名なところをしようかいうことになった。私は考えていると、ふと思った。最近、中学校で灯り湯に入ると、願いがかなうとうわさになった。私は、気になって灯り湯にいった。灯り湯は名前に灯りという言葉が入っているのに森みたいに静かだった。私が、本当にここか？と思いはじめると、おばあさんが手招きしていてついそちらへ行ってしまった。おばあさんは、しわくちゃな顔をもっとしわくちゃにして笑いかけて、話しかけた。

「灯り湯に来たのかい？」と聞かれると、

「そうなんです。場所を教えてくださいませんか？」というとき、おばあさんは大きな声で笑った。

「ここが灯り湯だよ。」といわれ、お風呂に入る準備をしているとおばさんが話しかけてきた。

「ここで願い事をするのかなうんだよ。」

といい、すたすた入口の方へ向かって歩いていってしまった。私は、かなわないだろうと思っていたが、おばさんにいわれ、かなう気がしてきた。とりあえず、願ってみた。

「夢でもいいのでカッパに会わせて下さい。」

私は菊古川にカッパがでたと知って、会いたかったのだ。ふるを出ると、夜の十時だった。私は、急いで服をきていえに帰った。

次の日、学校の帰り道に菊古川によってみた。すると、思いがけないものがいた。それは、昨日願ったあのカッパだった。私はびっくりして、

川に飛びこみ頭をひやした。だが、カッパはまだいたもんで、自分の目を信じてカッパに話しかけた。

「あのう、カッパですか？」聞いてみると、すぐに返事が返ってきた。

「そうだよ。私は、カッパ。どうだい、私の友達になってくれんかの？」といわれ、ちんぶんかんぶんになって、しつ問した。

「あの、じょうだんですよね？」私は、不安に思いつつ、聞いた。

「じょうだんをいうカッパはいないよ。私は、本気だよ。なってくれないのかい？」私はおどろきながら

「はい、いいですよ。」といった。

カッパは、昔は菊古川に子どもが来たから盛り上がったいたけれど、このごろは、静かで子どもがこないから、友達をほしいというのだ。私は、気になって聞いた。

「昔は、友達はいたんですか？」すぐに答えが返ってきた。

「もちろん。そろそくだ。」でも、今は一人ってかわいそうと思ひ、遊ぶことにした。

「カップさん、明日中学校は休みなので、明日おもいつき遊びましよう。」といい、別れた。私は、楽しみでしばらくねられなかった。

次の日、カップは川から顔を出して待っていた。私は、カップも楽しみだったんだと、口もとをゆるませた。私は、水てっぽうとスーパーボールをもってきた。

「カップさ〜ん！ 来ましたよ〜！」カップのもとへかけよると、カップは笑顔で立っていた。

「来てくれてありがとう。うれしいよ。」

カップと最初に水てっぽうをし、次におにごっこをし、最後にスーパーボールを高く上げられるか対決をした。一息ついたら、夕方になっていた。私はカップさんにまたきますといい、帰った。私は、思いついた。

エリートの宿題の街のしょうかい文には、昨日と今日のできごとをか

けばいいと思ひ、カップさんと灯り湯のことをかいた。かいていると、

思ひ出してふき出したりしながら、町のしょうかい文を完成させた。

次の日、エリートで宿題を提出して一週間後に行くと、先生に、町

のしょうかい文はうまかったよといわれ、てれてしまった。でも、これ

は、カップさんのおかげと思つた。

\*\*\*

### ぼくの三日間

イピロー(小六)

九月一日月曜日

天気…晴れときどき曇り

ぼくは今日七時に起きた。一階からいつも通りのパンのいいにおいがした。今日は父と母に手伝いを約束した日だ。明日の開店のためにパンの生地を練った。しかし意外と簡単だったので一しゅんで終わった。八時半からたつみと井原と遊ぶ予定だったので自分の家からみずべ公園に走って行った。持ち物はバットとグローブをもっていった。みんなでキャッチボールや守び練習をやってコントロールがちよつとだけよくなった。たつみはとても野球がうまい。ぼくはたつみと一緒に阪神タイガースの野球チームに入っている。二人と遊んだあとたつみと一緒に母に市立火借運動公園まで送ってもらいチームの練習に行った。最初はキャッチボールからで、さつきやったのでうまくいった。その次はし合だ。ぼくとたつみは同じチームになったからセカンドたつみ、ショート後藤でやった。一回ウラ一番が打って二番も打った。三番でたつみがセンター前ヒットで、ノーアウト満るいになった。そこから

ぼくがバッターボックスに入った。それでぼくはみごとにホームランを打った。ナイスぼく。そのあと無失点におさえて4-0でぼくたちは勝った。ぼくは今日のヒーローに選ばれた。久しぶりに選ばれたのうれしかった。

九月二日火曜日

天気…雨ときどき曇り

今日はぼくは、ねぼうせずに起きた。今日も朝食はパンだ。今日ぼくが選んだパンはメロンパンだ。いつもどおりにおいしかった。七時五分に家までてお宮通り商店街でたつみと井原と合流して学校に行った。一、二時間目は図工だった。絵で学校のお気に入りの場所をかいた。ぼくはもちろん運動場にした。一時間目では運動場のなかのどこを、どんな角度でかくかを決めた。その場所をアイパッドでとった。

二時間目は白紙をとり、一時間目にとった写真をみて下かきをはじめた。これがめちやくちやむずかしくて一本線をかくのに十分以上かかった。写真を見てかくのはあきらめて、外に出てかくことにした。それが効果がよくて意外とすらすらとかけた。二時間目が終わり二十分休みになった。ぼくは今日手打ち野球をやった。ぼくはセンターをやった。けれどもぜんぜんボールが飛んでこなくてひまだった。バッテリーでは六番で二回バッターボックスに入って打率は五割だった。味方がホームランを打った。その一点を守ってぼくたちが勝った。五時間目はダンスの授業で一組がおどっている所を二組が見て、二組がおどっている所を一組が見た。まったくおどれない人がいておもしろかった。一人目はカクカクで横を見たりしていた。二人目は変な動きでタコミたいにおどっていた。三、四人目はふりつけをおぼえていずに逆方向にまわっていた。ぼくは家でちゃんと見ておぼえたから

大じょうぶだった。けれどもぼくよりうまい女子がいてくやしかった。

九月三日(県民の日)

天気…雨

今日はせっかく県民の日だからなぜ今日が県民の日か調べた。すると明治時代に巳神藩と菊古川より北東にある下松藩が合体したのが今の戸堂布県らしい。今は全国に七十二県がある。調べているうちにあつというまに昼になった。ぼくたちは戸堂布県名物菊古そばを食べにいった。県内に十二店あるうちぼくたちが行っていないのはあつと一つだから今日最後の店に行くことにした。最後の店の名前は師走だ。行ったらかべに除夜の絵があった。そして店を十二まわったらもらえるプレゼントとしてそれぞれの店内にかかっている絵のあつしゆく版のキーホルダーをもらった。

\*\*\*

ようかい退治

オセロ(小六)

いつもの市役所へ行こうと電車に乗った。しかしいつも通りねて三十分後くらいに起きると、もうそこは電車の中ではなかった。みこし大通りに似ているが、着物やじんべいを着ている人が行き来している。そうしたら不意に、「なあ墨屋。」と声をかけられた。声のした方を見ると本を片手に持ち眼鏡をかけており、ちよつとぼつちやりしている男がいた。見覚えがある。小嶋雷山と鈴木緑一とだれかがいる銅像の小嶋雷山に似ている。思いきって名前を聞いてみると、「小嶋雷山だ。って、お前、人の名前を覚えられなくなったか。」と馬鹿にす

るように言われた。「本当、お前大丈夫か。」と反対の方から言われた。声が出た方を見るとやせこけていてぼうしをかぶっている男が立っている。この人もあの銅像の中の鈴木緑一に似ている。その人にも名前を聞いてみると「鈴木緑一。やっぱりおかしくなつたんじゃない。」と言われた。数分歩くと小嶋が「墨屋。いくぞ。」と自分の家らしき所まで連れていってくれた。

今ちよつとかんづいた。自分はタイムスリップしてしまったことを。小嶋の家を出て巳神城址公園があるはずの方へ向かうと世界で最も高かったと私の時代に伝わっている城が建っている。その中からは楽しい音楽と笑い声が聞こえてくる。そうしたら急に小嶋の声が聞こえた。「おいっ、そこで何してるんだよ。」ときりりとした声で言われた。そして、私は「夜の散歩をしてた途中。一しよに行かない。」と

さそい、ついてきてもらおうようにした。まず青姫井戸の水を飲み、南にくだって、行ったことのない道を通った先にはお寺があった。そこへ行ってみると現在にはない寺だった。その寺はようかい寺といい、寺の本堂の前には十個ほどつばがある。その中には、さまざまなかようなようかいを閉じこめているらしい。お寺の住職が格別大きなつばを見せてくれた。そのつばはおよそ千体のようかいをふう印しているらしい。そのつばにはおそろしいようかいやおもしろいようかいもいるらしい。そして、数分見つめていると、急に外からズシンという音が聞こえた。外へ出てみると、ようかいをふう印していたらしい小さいつばがわれていた。おそらくそこにいたのら猫が倒したのだろう。それより問題なのはダイダラボッチと海ぼうずが出してしまったことだ。そして、ふいにガッちゃんともものがわれた音が聞こえてきた。そつちを見ると千体のようかいが入っている大きなつばがしんどうで倒れてしまった

らしい。そして、その大きなつばに入っていた千体のようかいたちがいっせいに外に出てあばれた。しかし、小嶋は見えていないらしい。つまり、特有の人しかようかいは見えないということだ。

ぼうぜんとしていると千本の矢が空からふってくるではないか。あたりを見まわすと、お坊さんが矢を引いて、とばしている。その千本の矢は、正確にようかいにあたりつきつきと倒されてふう印されている。そして、お坊さんに、「あなたはようかいが見えているのですね。なら、この刀でたおしてください。この大きさでは私だけでは倒せません。」とわたされたのは私の家に先祖だいたい伝わっている刀にている。刀を一ふりすると刀がのびいっきに二体切ってしまった。そしてふう印された。

一区切りついた時、刀が重すぎてつかれがたまってしまったらしい。私はうとうとしてきた。だが、ズリズリと大きな音がなり、目が覚め

た。お坊さんによると地ずりというようかいらしい。剣を持ち、ふって切りかかったら、急にちよう音波のような高い音が地ずりの口から発せられた。私は体がこわばり動けなくなった。お坊さんが矢を射ると矢が千本ほどにちらばった。しかし、矢はもとにもどるようにして弓にもどっていった。時間をもどったらしい。そして地ずりが首をのばし、お坊さんと私が食べられそうになった。目をつぶった。くるはずの激痛が来ないとふと目をあけると、電車の中だった。「あ、なんだ。夢か。」とつぶやいた。墨屋駅だったので、電車から降りいつもの市役所へ向かった。